



令和3年度 7月人権一口講座



人権一口講座

「転校生」

ある「いじめに関わる本」を読みました。(抜粋)

父の転勤に伴い、僕は小学校から高校まで幾度も転校し、転校するたびに強い緊張を感じ続けていた。何故なら僕はもともと人見知りです。クラスに溶け込めずいた。小学校入学から中学二年までの八年間は典型的ないじめられっ子だった。けれど、一人ぼっちで長時間過ごすうちにいじめられずにいるにはどうすればよいかと考え、次第にクラス全体を見渡す「視力」が自然とついたので。その「視力」とは、クラスメイトの力関係を観察し強いものにすり寄る、そんないやらしいことを子どもながらに覚えてしまった。自分がいじめにあわないために、クラスの強者に従順であること。また、いじめの側に付くことで私は身を守ることになった。それまで学校に通うのが嫌で仕方なかったのだが、以降は通うのが楽しくなってきた。どんな方法であつたにせよ「学校って普通に通うことができるんだ！」と思つたのである。

そうやって過ごしてきた僕は、また転校することになった。最後のホームルームで「お別れ会」をやってくれて、贈物や手紙を数多くもらった。家に帰りそれらを読んでみると「いつまでも友達で！」「またどこかで会おう！」「元気でやってね！」と同じような内容だったが、一通だけ長文の手紙があつた。

ある女の子の手紙だった。その子は「くさい、ブス」と言われるなど、学級一番のいじめられっ子。昔の僕と同じような立場でした。僕はその子と話したことはなく存在を意識したことなかったのだ。積極的にいじめたのでもなく、どちらかと言えば、いじめっ子と一緒に彼女を無視していた。

けれど、彼女の手紙には、冒頭に「ありがとう」と書いてあり少し驚いた。いじめる側にいた僕は「なぜ？」と思ひながら読み進めると「あなただけは私がいじめにあつてた時、手加減してくれました。感謝している。」と書かれてあつたのだ。そんな彼女も実は僕と同じ転校生であつた。『同じ転校生で彼女だけいじめられてかわいそうだ。』と僕は心の中で思つていたのである。しかし、僕はいじめる側に加わつていたのは間違いない。この手紙を読み終えた僕はどうしようもなく悲しくなり、「なんてひどいことしてたんか。」と涙が止まらなかつた。

いじめられているということが問題であり、いじめを無くすようにすること、これこそが大事だと読んでいて私は思ったのです。ですが、ふっと・・・。「手加減してくれた人に感謝？感謝ではないだろうけれど、彼女は少しの希望で持ちこたえていたのであるか・・・」と思うに至り、私は最後いたたまれなくなつたのです。

「熊本市ふれあい文化センター広報紙」かけはし「令和3年度7月号より」

短いメッセージ

やさしいことをすると やさしさが返ってくる
私はやさしい人になりたい

熊本市・熊本市教育委員会・熊本市人権啓発市民協議会 人権力リーダー 出水南小学校3年 徳永紗季さん(令和2年度の作品より)